

〈幼稚園教育〉

幼児の規範意識の芽生えを培うための援助の工夫

～身近な人とのかかわりを通して～

うるま市立田場幼稚園教諭 花 城 由紀子

I テーマ設定の理由

近年の少子化、情報化、物質的な豊かさ等の社会の変化の中で、子どもの実態も変わり、園に寄せられる期待も自ずと変化してきている。多くの子どもたちについて、食生活の乱れ、生活リズムや規範意識等の基本的な生活習慣が十分身につけていない、運動能力が低下している、コミュニケーション力不足といった問題が指摘されている。

それを受け、今回の幼稚園教育要領の改訂が行われたが、各領域に示す「ねらい」や「内容」の改訂は少なく、「内容の取扱い」に重点が置かれている。それらは、集団生活を通して「協同の精神」や「規範意識の芽生え」、「思考力の芽生え」、「言葉による伝え合い」、「表現に関する指導の充実」等である。

このような内容から今回の改訂は、人とのかかわりを重視したものであることがうかがえる。本園の幼児の実態としても、「明朗活発だが、我慢をしたり譲り合う心がまだ育っていない」、「友達同士の小グループでのつながりは見られるが、集団へのかかわりが希薄である」、「遊具・用具の丁寧な扱いや片付けが身につけていない」等、やはり人・物とのかかわりにおける、規範意識の面で幾つかの課題が見られる。

それらの課題を受け、幼稚園で取り組むべきことは何であるかを明らかにし、実践へつなげていかなければならない。幼児の規範意識は、日常生活の中で人との温かいかかわりを通して形成されるものであり、規範意識をはぐくむために大切なことは、まず、「人への信頼感」である。教師や友達との信頼関係の中で幼児は自己発揮し、園生活を生き生きと活動するようになる。そして、友達とのかかわりの中で、互いの思いを主張し合い、「葛藤体験」や「折り合いを付ける体験」をすることが大切になってくる。

また、幼児の「基本的な生活習慣」がしっかり身に付くよう、園生活と家庭などでの生活の連続性を踏まえ、家庭と連携し、より望ましい方向へ導く必要がある。

このように、規範意識は、心の教育である「道徳」や心と体の健康をはぐくむ「基本的な生活習慣」などの複数の要素が含まれていることから、総合的に培っていく必要がある。また、幼児教育の基本は生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであり、小学校以降の規範意識や道徳観の土台づくりとなる。幼稚園から小学校への円滑なつなぎをしっかりとしたものにするためにも、教師は小学校の行動様式や考え方に触れ、連携をとることも求められるところである。

よって、規範意識の芽生えを培う基盤となる「教師や友達との信頼関係を築くこと」、「基本的な生活習慣を身に付けること」、「自分の気持ちを調整すること」を園生活全体を通して、総合的にはぐくむ必要がある。これらを踏まえ、身近な人とのかかわりの場面において、幼児の「気付き」を促す援助をすることによって、幼児の規範意識の芽生えを培えるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

- 親しみをもって友達とかかわり、自分の思いが言える子
- よいこと・悪いことがあることに気付き、考えながら行動する子

Ⅲ 研究目標

1 基本目標

幼児の「規範意識の芽生え」を培い、自分の気持ちを調整しようとする幼児をはぐくむ。

2 具体目標

- (1) 幼児の規範意識の芽生えを培うための「要素」を明確にする。
- (2) 幼児の規範意識の芽生えを培うための援助の在り方を明確にする。
- (3) 幼児の規範意識の芽生えを培い、自分の気持ちを調整しようとする幼児をはぐくむための保育実践をする。

Ⅳ 研究仮説

1 基本仮説

幼児が教師との信頼関係を基盤に自己発揮し、様々な葛藤体験を通して、きまりの必要性や他児の思いに気付かせる援助を積み重ねることで、規範意識の芽生えを培い、自分の気持ちを調整しようとするであろう。

2 具体仮説

- (1) 一人ひとりの幼児に思いを寄せ、内面を理解することで、教師との信頼関係を築き、心の安定から自己発揮するであろう。
- (2) ルールのある遊びにおいて、互いに主張し合い葛藤体験を通して、きまりの必要性に気づき、自分の気持ちを調整しようとするであろう。

Ⅴ 研究経過

月	研究内容	備考
10	・研究テーマ設定と研究計画の立案 ・文献資料による理論研究 ・アンケートの実施	・研究教員入所式 ・テーマ検討会
11	・文献資料による理論研究 ・検証保育指導案作成・準備 ・検証保育の実施 ・アンケートの集計・考察・分析	・検証保育
12	・検証後の分析 ・文献資料による理論研究 ・中間報告会に向けての資料作成	・中間報告
1	・文献資料による理論研究 ・検証保育指導案作成・準備 ・検証保育の実施	・検証保育
2	・検証後の分析 ・研究資料のまとめ ・報告書作成	
3	・研究報告会準備 ・研究の成果と今後の課題	・報告書検討会 ・研究報告会 ・研究教員退所式

VI 研究の全体構想図



VII 研究内容

1 理論研究

(1) 「規範意識の芽生え」とは

① 「規範意識」とは

規範とは、「幼児の場合には子どもを囲む様々な決まりのことである」と無藤氏は述べている。そのような規範を守ろうとする意思を「規範意識」と捉える。

(無藤隆「保育所保育指針 幼稚園教育要領解説とポイント」)

幼児を囲む様々な「規範」を3つの場面において具体的に例示すると下記のようなになる。

ア 家庭・家族と過ごす時 (家族が健康で気持ちよく過ごすために)

- あいさつをする(「おはよう」、「おやすみ」、「いただきます」、「ごちそうさま」等)
- 早寝早起きをして朝食を食べる
- 後片付けや手伝い
- 履物をそろえる

イ 様々な人とかかわる時 (人と人が心をかよわせるために)

- 相手を見て「あいさつや返事をする」、「話を聞く」、「話をする」
- 「ごめんなさい」、「ありがとう」を言う
- 約束を守る
- 間違っただけや危険な誘いは断る
- 友達とけんかをして仲直りをする
- 我慢をする

ウ 公共の場に出かける時 (たくさんの人が安全に気持ちよく過ごすために)

- 順番を守り、割り込みをしない
- ごみのポイ捨てをしない
- 手にとった商品は丁寧に扱い、買い物カートはきちんと戻す
- お店の前で座り込んだり食べ物を食べたりしない
- お店の中を走り回らない

(栃木県総合教育センター調査研究「とちぎの徳育推進事業子どもたちの規範意識を育てるための指導資料及び教材集」参考)

上記の具体例示をみると、日常の生活で繰り返される生活習慣や善悪の判断、約束を守ることが規範意識へつながることがわかる。

つまり、「規範」は、日々、繰り返し行われている「慣習」、話し合っただけで意見を合わせて決めた約束・契約などの「合意」、人々が善悪をわきまえて正しい行為をなすために守り従わねばならない「道徳」と関連があるといっている。特に「道徳」は、人が踏み行うべき道。物事の善悪の判断をする基準であり、規範の総体である。また、「県の学力向上主要施策にぬふぁ星プランⅡ」の全体図においては「基本的な生活習慣」の中に、生活リズムの確立、規範意識・マナーが含まれている。

上記のことを踏まえ、「規範意識」は、複数の内容と関連していることから、遊びや生活を通して総合的に培っていくことが必要である。

② 「芽生え」とは

「芽生え」とは、広辞苑によると「物事の起こり始め、きざし」とあることから、幼児の規範意識の芽生えとは、幼児が身近にある様々なきざしに気付いて、それを守ろうとする心が働きはじめることと捉える。

「決まりを守ろうという気持ちの育ちや、ルールが必要であることへの気付き、そして、自分の気持ちを調整する力の育ちなどが芽生えである」と友定氏は述べている。

(友定啓子 小学館発行「3・4・5歳児の保育」)

「人間関係」の領域における内容の取り扱い(5)においても「きざしの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整しようとする力が育つようにすること」とある。

上記のことを踏まえ、幼児期の段階で完璧にきざしを守れるように育てることがねらいでは

なく、きまりの必要性に気付かせることや自分の気持ちを調整しようとする力をはぐくむことが大切である。きまりや人に対する態度についての基本的な体験をしっかり積んで、小学校に進んで同じような状況になったときに生かせることが求められている。

③ 善悪の意識

ア 他律

幼児は大人が言うことは正しく、大人から罰せられることは悪いことと判断する。規範や命令に対して、自分で考えることなく、叱られるから従うという道德観を児童心理学者のピアジェは「他律の道德」と呼んでいる。

幼児は、すぐに物事の良し悪しを判断することができない。善悪の判断ができるようになる前に、幼児は行動の基準を身に付ける。それは、周りの環境に影響されたり、褒められたり、叱られたりすることによってである。押谷氏によると幼児の行動の基準は、「快・不快の感情が支配する」と述べている。善悪の意識が育っていなくても、快・不快の感情で判断している。それが結果的に、してよいことと、悪いことの意識を育てる。

そこで、周りの大人の対応として、大人から見て道德的な行為であれば、褒めたり、大人が喜んで見せる等して幼児が「快の感情」を得られるような対応をする。逆に反道德的・非道德的行為をとる時は、叱る、顔をしかめる等の反応を示し、幼児が「不快な感情」を得られるようにすることが必要である。

(押谷由夫「幼稚園じほう」)

イ 自律

幼児は徐々に、相手を思いやる気持ちが芽生えたり、生活上のきまりにも気付き、守ろうとすると同時によいことや悪いことの判断もするようになる。このような友達を思いやる、道德意識の発達をピアジェは、「他律から自律への移行」として捉えている。

幼児期においても、他者とのかかわりの中で、状況によっては、相手の反応から自分がしたこと、よかったのか悪かったのか考えることができる自律的な面ももっている。「嘘をつく」、「約束をやぶる」といった行為そのものを、叱られたから悪いことであるという捉え方から、遊びを通して、友達とかかわる中で、相手を傷つけて、仲良く遊べなくなったという「体験」によって悪いことという捉え方に徐々に変化してくる。

子どもたちの自律性を促進するためには、できる限り教師の権威を減らし、物事を決める権利と責任を子どもたちと共有することが必要である。一方的に押し付けるルールではなく、自分たちでルールを作ることで、責任をもち守ろうとする。ルールを決める過程で、自分たちの意見が尊重されているということがわかると、他者の意見を尊重するようになる。お互いの意見を交換し合うことは、社会道德的発達のためだけではなく、子どもたちの知的発達のためにも不可欠である。

このように、賞罰や権力に左右されず、何が正しいか正しくないかという判断によって行動する力「自律」を幼児期から促し、はぐくむ必要がある。そして、発達途上の幼児は、よいこと・悪いことをすぐに理解し、実行できるわけではなく、失敗などを通して実感していくものなので、そうしたプロセスを大切にしていく必要がある。

(滝沢武久「他律の心から自律の心へ」)



図1 道德性の発達と規範意識の形成

(2) 規範意識の芽生えを培うための「要素」

規範意識を培うために、大切な事柄を「要素」と呼び、図で示すと下記のようなになる。

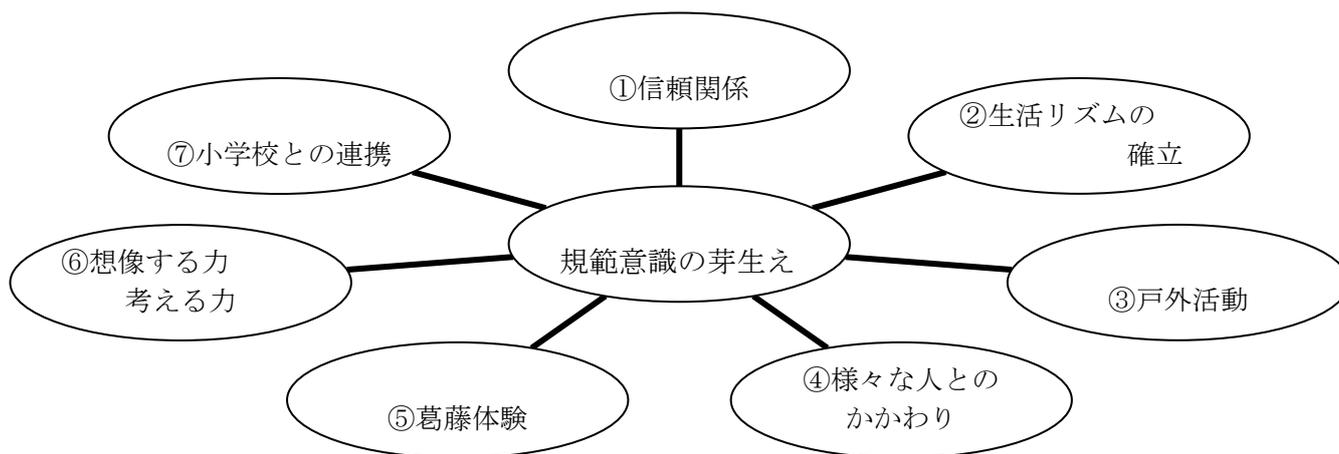


図2 規範意識の芽生えを培う要素

① 信頼関係

幼児の規範意識をはぐくむために一番大切なのが、「信頼関係」である。教師が共感し、真心をもって接することで、心のぬくもりが幼児に伝わる。相手の立場に立って真剣にとらえて対応する教師の姿勢から、幼児は信頼感を確立し、先生は自分の見方だと捉えるようになる。

また、日常生活で、教師や大人が「ありがとう」、「ごめんね」、「よくやったね」という温かい言葉かけをごく自然に行っていれば、幼児同士も自然と使えるようになる。教師がよいモデルとして、人的環境になることが大切である。

このように、幼児一人ひとりの心に寄り添い、丁寧にかかわることで信頼関係を築いていく。幼児は身近な大人から受けとめられ、見守られているという安心から、活動への意欲が高まり、行動範囲も広がっていく。つまり、教師との信頼関係を築くことで、幼児は自己発揮していく。

② 生活リズムの確立

幼児の規範意識をはぐくむための基本は「自分でできことは自分でする」ことである。入園当初の幼児は、教師が寄り添い適切な援助を行うことで徐々に生活に必要な様々な習慣や態度を身に付けていく。しかし、遊びに夢中になるあまり、基本的な生活行動がくずれてくる時もある。このような、幼児の行きつ戻りつする過程を大切にしながら、状況に応じた援助と、家庭との連携を充実させることが、基本的な生活行動を着実に身に付けていくこととなる。

また、基本的な生活習慣の形成は、健康な体をはぐくむだけではなく、自信や意欲につながり、自己コントロールする力にもつながっていく。

③ 戸外活動

幼児が全身で自然を感じ取る直接体験は、幼児の心を動かし、幼児の成長に大きな意味をもつ。身近な動植物の世話を通して、いたわりの気持ちもはぐくまれる。体験を通して小動物の接し方などを学び、生命の尊さに気付く。生命の大切さを幼児期からはぐくむことは、規範意識へつながっていくと考える。

④ 様々な人との交流

地域の人や異年齢の人との交流を通して、人とかかわる力をはぐくむことが大切である。例えば、高齢者と触れ合い、自分がしたことを感謝されて嬉しかった、自分は頼りにされているといった、自分が役に立つ喜び体験を通して、「自己有用感」が得られる。そのような人に役立つ喜び体験が奉仕の心へとつながっていくと考える。

様々な人とのかかわりの中で、温かい声をかけてもらったり、共感したり、共感されたりする喜びを味わい、他者からの期待を実感することで、自分への自信をもち、相手のよさを認め信頼関係が築かれていく。

⑤ 葛藤体験

集団生活において、自己発揮してくると意見の相違による葛藤や、物をめぐるとラブル等が生じてくる。そこで、大切なのが自分の思いを主張することである。発達段階から見ても、幼児期は互いに自分の思いを主張し合い、折り合いを付ける体験を重ねることを通して、きまりの必要性などに気づき、自己抑制ができるようになる時期なのである。幼児の集団遊びは、互いの異質性が生み出す葛藤から違いを知り、それを認め合う機会にあふれている。みんなで楽しく遊ぶた

めにルールを守ること、自分の役割を遂行しようとする、互いに協力することなどを、葛藤体験を通して体得するのである。

また、遊び仲間と相談して了解を得れば状況に応じてルールを変えたり、新しいルールを作り出すこともできるので体験的に社会規範を習得し、自律性を培うことができる。

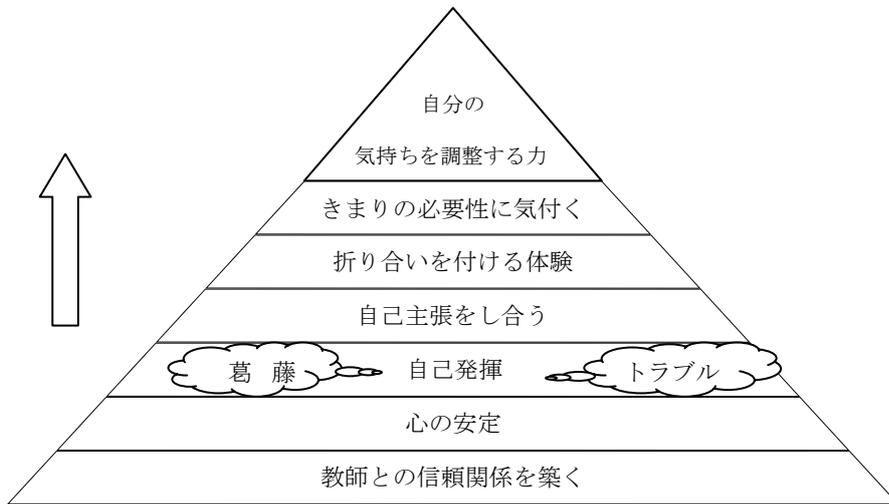


図3 葛藤体験を通して芽生える規範意識

⑥ 想像する力・考える力

幼児は身近な環境にかかわり、感じたことや考えたことなど、イメージを広げることの積み重ねを通して、感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていく。また、絵本や紙芝居を通して、想像を巡らせて楽しんだり、絵本の内容に浸り、悲しみや悔しさなどの間接的な体験を通して、他人の痛みや思いを知る機会となる。

そして、考える力に関しては、幼児自身、自分が行った行為が、よかったのか悪かったのか考えるよう促し、自ら気付くように援助する必要がある。このような積み重ねが想像する力・考える力をはぐくむ。

想像する力や考える力をしっかりとほぐくんでいると、相手の立場に立って考えることや、共感的に考えること、自らを見つめることの基礎的能力になる。

⑦ 小学校教育との連携

幼稚園文化と小学校文化をつないでいくという取組が大切である。幼児は幼稚園の文化（行動様式や考え方）と進学する小学校の文化とに違和感があるとき、戸惑い規範意識もあやふやになる。教師が小学校の文化に触れ、連携を図ることが求められている。

(押谷由夫「幼稚園じほう」)

(3) 自分の気持ちを調整する力（自己制御）について

① 自己主張・実現面的側面と自己抑制的側面

自己制御は、自己主張・実現面的側面と自己抑制的側面の二つに分けられる。

- ・自己主張・実現面→（いやなことや、他と違う意見をはっきりと言える）
（やりたい遊びに他の子を誘って遊べる）
- ・自己抑制面 →（ほしいものを我慢できる・人に譲れる）（きまり・ルールを守る）
（くやしいことや悲しいことに感情を爆発させない）

この二つの側面は幼児期にそれぞれ異なった発達を見せる。自己主張・実現は、3歳から4歳後半にかけて急激に増加し、その後はあまり変化がない。一方、自己抑制は3歳から小学校入学まで、一貫して伸び続ける。

また、男女差が見られ、どの年齢でも女の子の方が自己抑制が高いことが示されている。しかし、「発達差だけではなく引っ込み思案の子や主張しすぎる子など自己制御能力の個人差も存在する。」と柏木氏は述べている。

（柏木恵子「幼児期における『自己』の発達」）

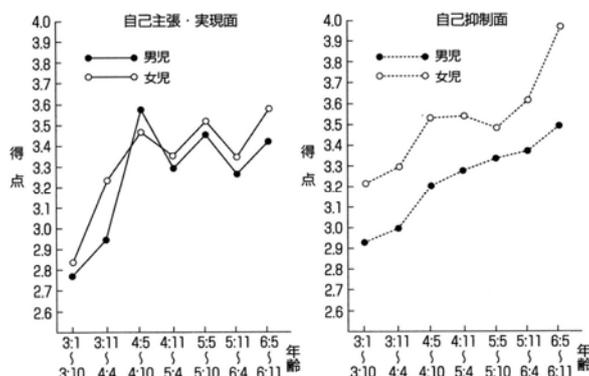


図4 2つの自己制御能力（自己主張・実現と自己抑制）

② 望ましい自己制御

規範意識の芽生えを培うには、葛藤体験、折り合いを付ける体験が必要であり、それは、互いの思いを主張し合い成立する。しかし、自分の気持ちを抑えて、友達の思いを受け入れる自己抑制ばかりでは、折り合いを付ける体験はできない。確かに集団生活では協調性が求められ、人に譲ったり我慢も必要であるが、自分の思いを言葉で表現することも大切である。

しかし、今日の家族構成として、核家族化、一人っ子の増加や兄弟姉妹の減少による家族の少人数化があげられ、家庭内で兄弟喧嘩や葛藤体験が少なくなっているように思われる。クラスの実態としても、一人っ子が全体の16%、二人兄弟は39%で合わせて兄弟姉妹が二人以下は55%とクラスの約半分を占める。また、自由に安全に遊べる空間の減少や、共働き家庭の増加で幼稚園から降園後の預かり保育、学童保育の利用などの影響により、地域の子ども同士のつながりが薄れてきている。

このことから、家庭においても自分の思いを主張したり、相手の意見を聞いたりコミュニケーションする経験が減少し、家庭内は子どもの社会性が育ちにくい環境におかれているといえる。

また、「青少年の育成に関する有識者懇談会報告書」においても、今日の青少年の実態として、集団生活につきものである軋轢や、人とかかわる煩わしさを避けて自分の意見が言えない若者が増えていることが指摘されている。これらのことを踏まえ、幼児期から間違ったことや危険な誘いは断る自律性を養い、自己主張や折り合いを付ける体験を通して、自他の気持ちや欲求は各々異なることに気付き、互いのよさを認め合える仲間と育っていくことが望まれる。

（「青少年の育成に関する有識者懇談会報告書」青少年の育成に関する有識者懇談会）

(4) 社会性の発達

幼児は、「他律から自律へ」、「身近な集団から広く社会へ」と変化しながら、社会性が身についてくる。援助にあたっては、幼児の発達段階や実態を考慮しながら、どの段階においても内面化の援助と実践化の援助のバランスをとることが必要である。9ページの表1「乳幼児の社会性の発達と心の発達を促す遊び・かかわりの実践例」によると、5歳では「社会的なルールが身についてくる時期」とある。本園の対象としている5歳児の園児は、まさに規範意識が芽生える時期であることがわかる。この発達過程は、同じクラスの子どもの平均的な育ちを示しているのではなく、一人ひとりの子どもがたどる道筋であることを理解する必要がある。

表1 乳幼児の社会性の発達と心の発達を促す遊び・かかわりの実践例

時期	感情・社会性	心の発達を促す遊び・かかわり 実践例
1歳6ヶ月から3ヶ月未満	<p><u>情緒的な絆が深まる時期</u></p> <p>情緒的な絆が深まり、身近な大人にあやしてもらいと喜ぶなどする。その一方、知らない人に対して泣くこともある。周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる時期でもある。</p>	<p><u>絆を深める「まてまて遊び」</u></p> <p>愛着関係が深まった時期に楽しめる「まてまて遊び」。信頼する大好きな人を追いかけたり、その人に追いかけられたりすることで、より一層楽しみが高まる。最後は「つかまえた」とぎゅっと抱きしめよう。</p>
2歳1歳3ヶ月から1歳未満	<p><u>したい気持ちとできることに、ギャップのある時期</u></p> <p>友達や周りの人への興味が高まる。他の子どもの持つ物を欲しがったり、取り合ったりしながら、子ども同士のかかわりが育まれていく。また、遊具などを身近なものに見立てる「象徴機能」が発達し、「見立て遊び」がはじまる。</p>	<p><u>「おんなじ」を楽しむおもちゃ</u></p> <p>友達と同じ物を欲しがるところなので、同じ形の手作りおもちゃを数個用意する。ペットボトルの中身を変えることで、自分が興味のある物を選択することも楽しめる。</p>
2歳	<p><u>自我が芽生える時期</u></p> <p>自我が発達して自己主張が強くなり、自分で決めたり、自分でやろうとするがまだうまくいかないことも多く、反発したりする。まねっこが大好きで、大人と一緒にごっこ遊びを楽しむことができるようになる。</p>	<p><u>「自分でやりたい」気持ちを生かした生活習慣づくりを！</u></p> <p>なんでも自分で決めたい、やりたい時期である。その気持ちを生活習慣の自立へ生かしていく。着替えのときは、色柄やデザインの違う洋服を用意し、子どもが服を選ぶ。自分で選ぶことで、着替えへの意欲が持てる。</p>
3歳	<p><u>「きまり」にそって行動できるようになる時期</u></p> <p>まだ、一緒の場所においてもそれぞれが別のことをして遊ぶ「平行遊び」も見られるが、友達とごっこ遊びを楽しむことが増えてくる。一方で、友達同士のトラブルも増えるが、第三者的な子どもが仲裁に入ったり、順番などの決まりを守ることで、それ解決しようとする姿も見られる。</p>	<p><u>お互いの気持ちがわかり合える「フルーツバスケット」</u></p> <p>最初は保育士と子どもが一人オニになります。保育士がオニを楽しむことで、オニになりたい子どもが増えてくる。ゲームに慣れてきたら、子ども二人がオニになる。子どもが椅子を取り合ったりした場合は、すぐに保育士が入らず、様子を見て、おさまらない時には間に入り、お互いの気持ちを聞いて、解決していく。</p>
4歳	<p><u>仲間とのつながりを楽しむようになる時期</u></p> <p>友達と一緒にいることが楽しくなり、仲間とのつながりも強くなる。けんかが増える半面、人を思いやる気持ちも出てくる。不安や我慢といった葛藤を経験したり、その気持ちを周りの大人に共感してもらったりしながら、人の気持ちがわかるようになってくる。</p>	<p><u>のびのび砂場遊び</u></p> <p>数人で力を合わせてつくり上げる遊びに発展していく時期である。砂遊びなど、数人がかかわれるものが多い。砂を運ぶ子、バケツで水を運ぶ子、山の形を整える子、自然に役割が決まる様子が見られるようになる。</p> <p>保育士は入り込みすぎず、それぞれの役割を見守る。ジョウロやバケツなど、さりげなく環境におくなど、遊びが発展するよう援助する。</p>
5歳	<p><u>社会的ルールが身についてくる時期</u></p> <p>同じ目的を持った仲間と集団で行動することが多くなる。遊びをより楽しむために自分たちでルールをつくったり、守ることの必要性を理解していく。他の人の役に立つことを嬉しく思うなど、集団の中の一人としての自覚も生まれてくる。</p>	<p><u>手伝いを楽しむ「当番制」</u></p> <p>人の役に立つことや、喜んでもらうことで、意欲が高まる年齢である。自分たちでできることを話し合っ、当番を決める。</p>
6歳	<p><u>仲間意識が強くなる時期</u></p> <p>仲の良い子と数人で過ごし、自分たちだけの秘密を共有するなど、仲間意識が強くなる。仲間を大事にし、ときには自分が我慢することも覚えていく。</p>	<p><u>つくる・演じる劇遊び</u></p> <p>まずは、絵本を持ち寄り、みんなで話し合っってどんな劇をするか決める。役を決め、場面に必要な道具や衣装をつくることも話し合っって決めていく。</p> <p>役になりきることで、想像力を高める。友達と協力して、物をつくることのおもしろさを楽しむ。</p>

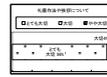
(監修 大場幸夫 「保育所保育指針ハンドブック」参考)

2 幼児の実態把握

園生活と家庭での生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実を図るため、アンケートを実施し、実態把握をした。実態を家庭へ知らせ、保護者の「規範」への意識向上と幼児の望ましい生活態度が身に付くよう呼びかけを行った。

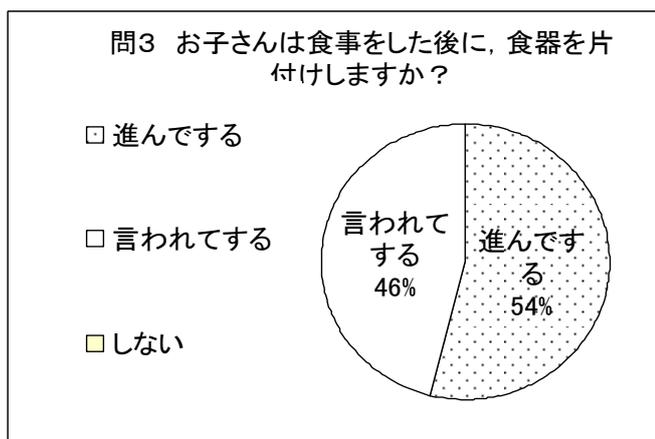
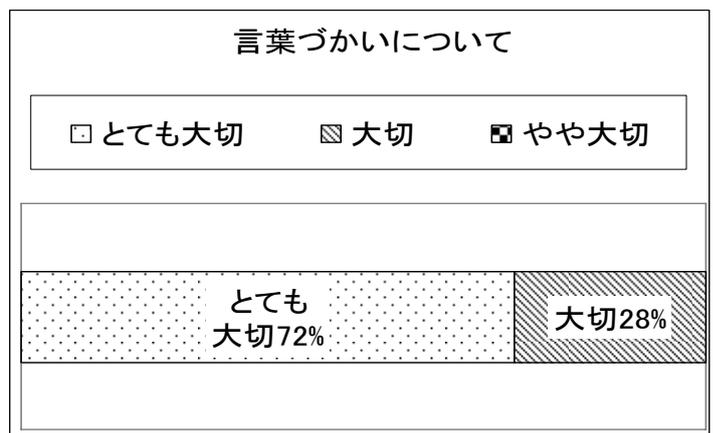
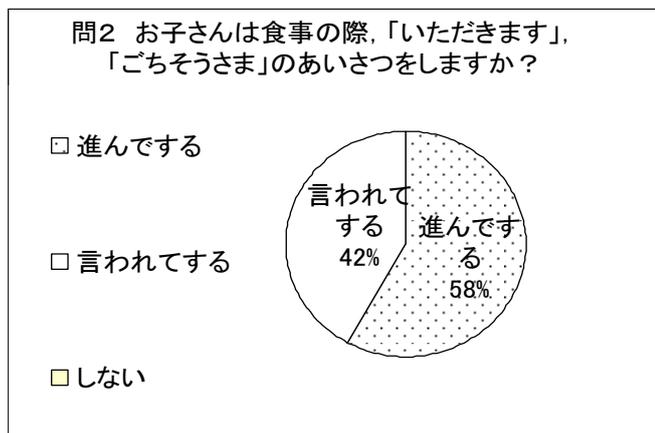
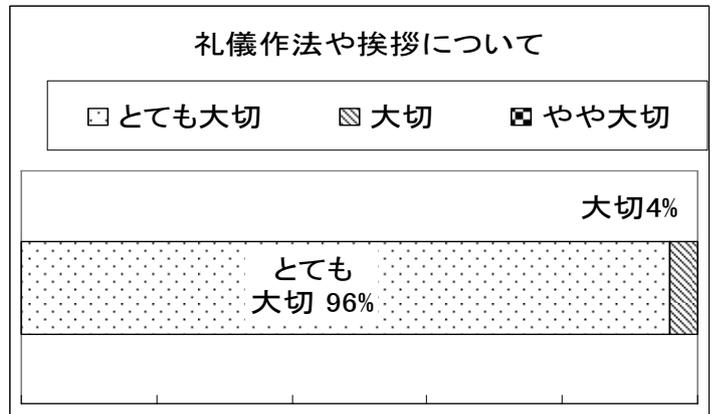
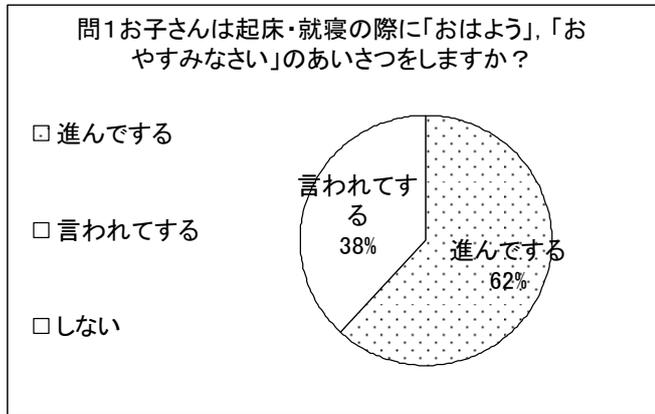


円グラフ…家庭における幼児の生活態度



棒グラフ…家庭におけるしつけをどの程度大切と思っているのか。

保護者の意識



分析・考察

円グラフの問1～問3まで「進んでする」が半数以上示しているため、望ましい傾向と捉える。

また、棒グラフの「礼儀作法やあいさつについて」、「言葉づかいについて」家庭で教えたり注意したりすることは、どの程度大切かという質問で「とても大切」と「大切」を合わせると100%になり、保護者の意識が高いことと幼児の生活態度に関連がうかがえる。

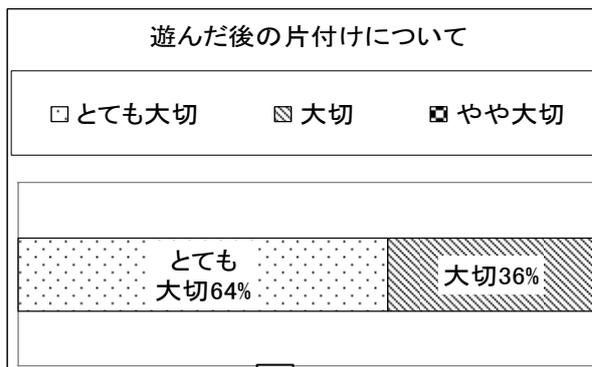
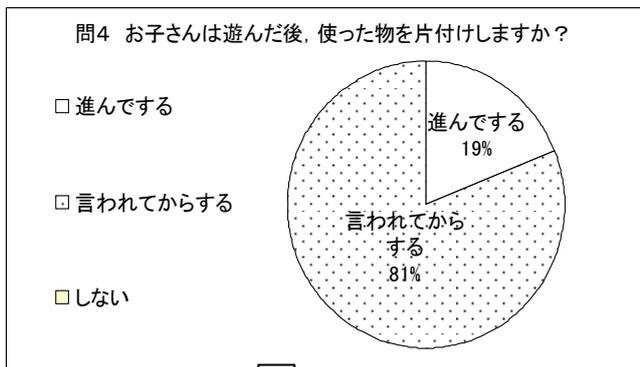
幼児期においては、色々な意味で「芽生え」の段階なので「できる時」と「できない時」があることを念頭におき、発達と共に理想に近づけられるよう家庭と園が連携して、その時に応じて声かけしていく必要がある。



円グラフ…家庭における幼児の生活態度



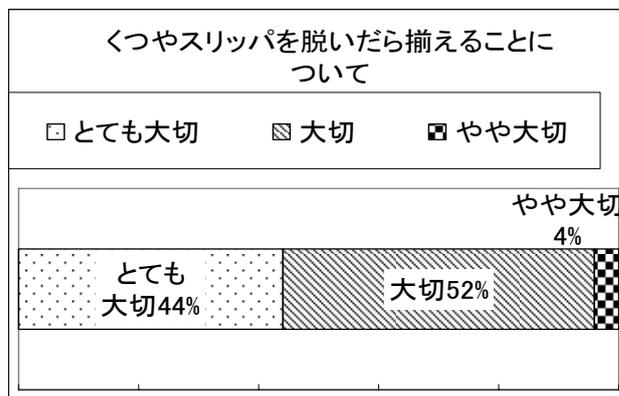
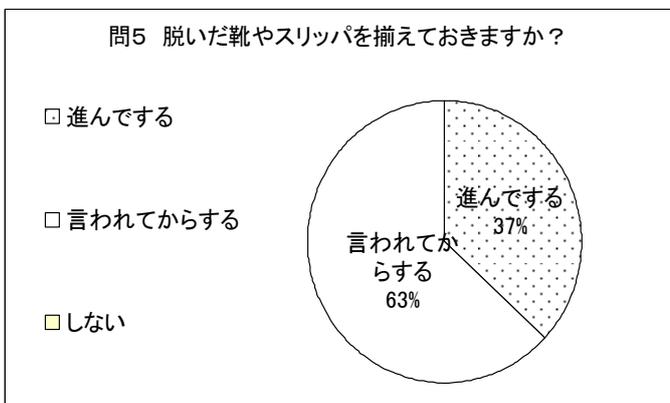
棒グラフ…家庭におけるしつけをどの程度大切と思っているのか
保護者の意識



分析・考察

園においては、園生活の流れにメリハリがあり、環境の工夫や幼児の発達と共に片付けがスムーズに行えるようになってきている。遊び終わった物を進んで片付けて、次の活動に移るのが理想だが、家庭においては、決まった時間の区切りがなく、家族だけの空間なので、園同様にはいかない。全く「しない」幼児は0%、「進んでする」は19%、8割は親に言われて素直に片付けができるということは、発達途上の子どもの姿なのかと考える。

しかし、保護者自身が、成長の機会を与えるというプラスの発想で片付けを捉えることが大切である。片付けのしつけをする前に、片付けしやすい環境を整えていく必要がある。ポイントとして、適切な置き場所であること・しまいやすいこと・スペースにゆとりがあることの3点である。片付けしやすい環境が用意されていれば、子どもにとって「片付けは嫌なこと」ではなくなり、変容が見られると考える。家庭においても工夫ができるよう呼びかけていきたい。

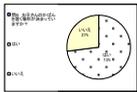


分析・考察

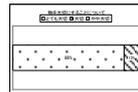
園においては、「靴は脱いだら靴箱へ、トイレのスリッパは次に履く人のために揃えておきましょう」と声かけし、習慣付けているため定着しつつあるが、家庭において「進んでする」は37%、保護者も「とても大切」が44%と半分以下で意識が低い。

園と家庭ではトイレのスリッパの数が違うのと、家では履物をすぐに揃えなくてもなくしたり、人に迷惑をかけることが少ないという環境の違いが数字に出ていると思われる。

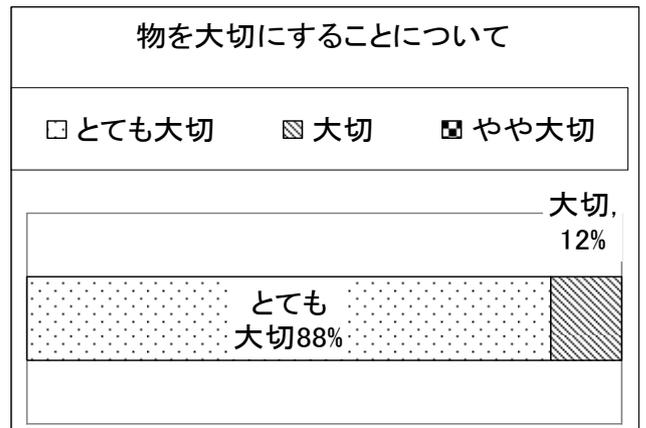
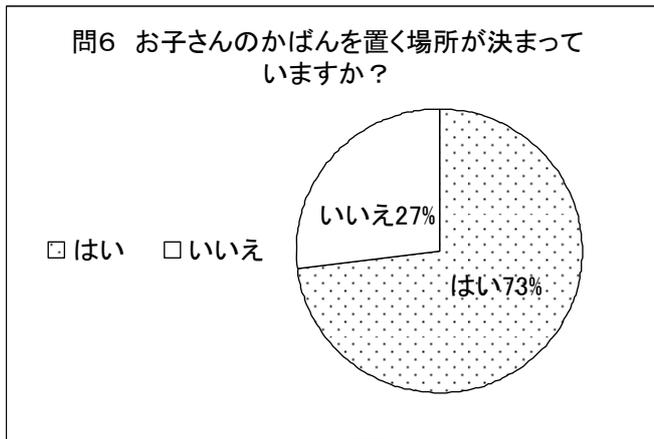
しかし、当たり前のことが当たり前にできるように家庭でも意識し、身の回りを整える基本的な生活習慣を身に付けていくことが望ましい。クラス日より等で呼びかけていきたい。



円グラフ…家庭における幼児の生活態度

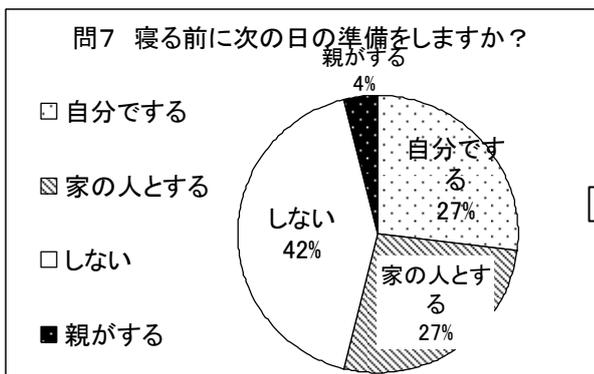


棒グラフ…家庭におけるしつけをどの程度大切と思っているのか
保護者の意識



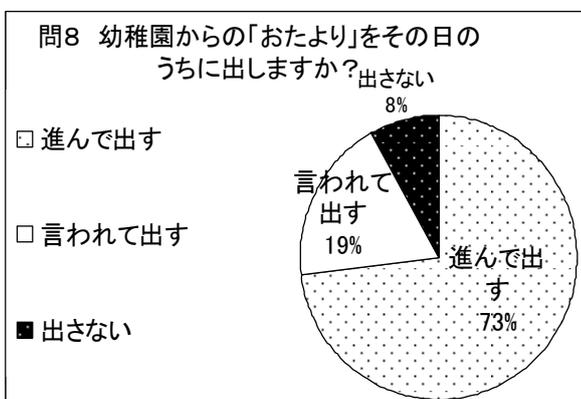
分析・考察

かばんを置く場所が決まっている幼児が73%であることと、保護者の「物を大切にすること」について家庭でのしつけが「とても大切」88%と意識が高いことが関連していて、望ましい傾向といえる。「身の回りを整え、物を大切にすること」という意識につなげるためにも固定の場所があったほうが望ましい。クラスだより等で実態を知らせ、より望ましい方向へ近づけられるようにしたい。



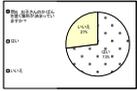
分析・考察

「自分でする 27%」と答えた幼児の中には、かばんに出席ノートのみ入っていて、着替えやタオル等が入っていないこともあった。「汚れたら清潔にする」習慣を身に付けるためにも改善が求められるところである。また、「しない 42%」はその日の朝に自分で準備するのか、親がするのか不明な部分である。上記のことを踏まえ、発達段階を考えると、理想としては、保護者と一緒に着替え・ハンカチ・出席ノート等の準備を前日にし、就学に向けて習慣化できるように各家庭に呼び掛けする必要がある。

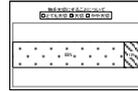


分析・考察

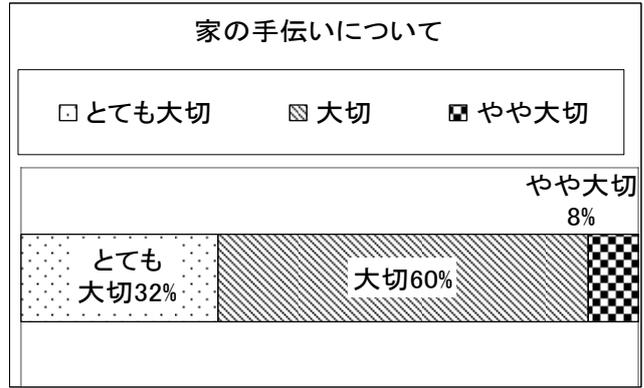
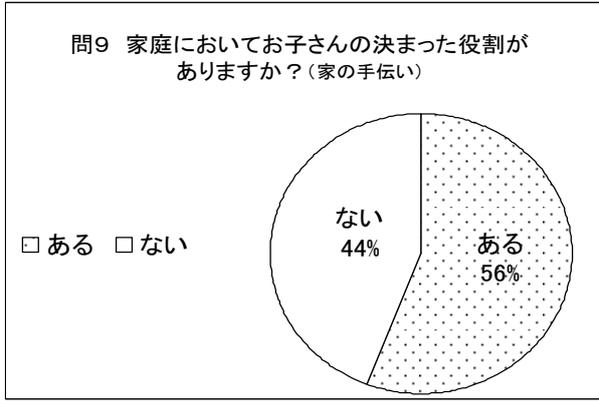
「進んで出す 73%」は望ましい傾向にある。しかし、「出さない 8%」は課題である。保護者が「おたよりある？」と聞いても幼児が出さないのか、保護者自身が聞かないのか気になるところである。幼児自身にもおたよりを渡す度に「おうちの人にきちんと渡すよう」声かけしたり、保護者にも個別に対応し、おたよりがある際は、全員に連絡事項等がお知らせできるようにしていきたい。



円グラフ…家庭における幼児の生活態度



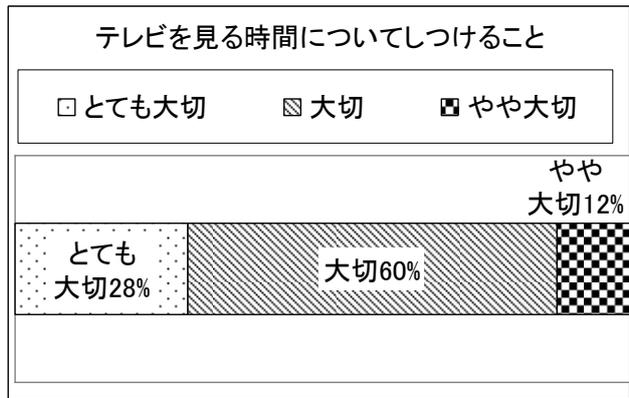
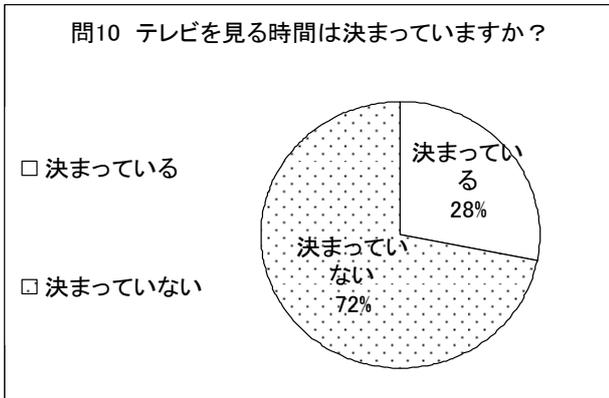
棒グラフ…家庭におけるしつけをどの程度大切と思っているのか
保護者の意識



分析・考察

「家の手伝いについて」家庭でしつけることは「とても大切」と答えた保護者は32%と、それほど重要視していないように捉える。保護者の意識に「もう少し大きくなってから！」という思いがあるのだろうが、年齢に応じた役割を持たせることで、家族の一員であることを自覚する。

また、自分がしたことを感謝され、頼りにされて「自分も誰かの役に立っている、認められている」といった「自己有用感」を得ることができる。実態を知らせて、保護者の意識を高めていきたい。



何時間視聴する？⇒ (30分・1時間・2時間・3時間)

分析・考察

「テレビを見る時間について」家庭でしつけることは「とても大切」と答えた保護者は28%。実際にテレビを見る時間が決まっている家庭は28%と保護者の意識が家庭内のルールに関係していることがうかがえる。

「決まっている」家庭においても、30分と答えた家庭と3時間と答えた家庭があり時間に幅がある。日本小児科医会での提言のひとつとして「すべてのメディアへの接触時間は2時間まで、テレビゲームは同30分までが目安」としている。無制限にだらだらとテレビを見ることが生活の一部として習慣化される前に「楽しい番組が終わったら消そうね」とルールをつくり約束を守るという躰をしていくことが大切であると考え。家庭内でよく話し合うようクラスだよりや保護者会等で呼びかける必要がある。

3 第1回検証保育

保育指導案（幼稚園教育）

平成20年11月27日

田場幼稚園 3組

男児13名 女児18名 計31名

教諭 花城 由紀子

指導講師 上原 須美子

(1) 幼児の実態

ほとんどの幼児は、明朗活発で動的遊びや話すことが好きである。また、エコ素材を使った製作遊びや折り紙遊び等、工夫して楽しく遊ぶ姿が見られる。しかし、課題として、我慢をして友達に譲るといった心がまだ育っておらず、自分の気持ちを調整する力が身に付いていないことがあげられる。そのため、生活のきまり・遊びのルールを守れずトラブルが日常的にあった。(1学期)

2学期になってからは、大きな行事である運動会を仲間とやり遂げた達成感や充実感から、心身ともに成長して、聞く態度や後片付け等の生活面での態度が良くなってきた。しかし、遊びの中でトラブルがまだ見られる。

(2) 設定理由

本学級の課題を踏まえ、クラスの仲間とかかわりながら、ルールを守ることで遊びが楽しく進められる集団的なルールのある遊び「ドッジボール」を設定した。

本活動において、ルールは理解していても勝ちたいという気持ちと葛藤してボールがあたっているも、言い訳を言って「あたっていない」等の主張をしたり、ボールを独占して、友達に譲るといった行動が取れないのではないかと予想される。

このようなトラブルを解決する過程において、幼児同士で折り合いを付ける体験ができるような援助を行うことで、ルールを守ることの必要性に気付くのではないかと考え、本活動を設定した。

(3) 活動名

集団的運動ゲーム「ドッジボール」

(4) ねらい

自分の気持ちを調整し、ルールを守ることで楽しく遊べることに気付く。

(5) 内容

- ① 友達や教師とかかわりながら、互いに思いを主張し合い、譲り合う中で楽しく遊びが進められるようにする。
- ② 戸外で体をのびのびと動かして遊ぶ充実感を味わう。
- ③ 友達とのつながりを感じながら、みんなで遊ぶ楽しさを味わう。

(6) 仮説

友達とのかかわりにおいて、葛藤や折り合いを付ける体験をしながら、自分の気持ちを調整し、ルールを守ることで、楽しく遊べることに気付くであろう。

(7) 評価

評価項目	○自分の気持ちを調整し、ルールを守りながら友達と一緒に楽しく遊ぶ		
評価の視点	A	B	C
	・トラブルが起きた時に、友達と一緒に解決しようとする気持ちを持ち、楽しく遊びを進めようとする。	・ルールを守りながら、友達と一緒に楽しむ。	
援助の手立て	・幼児が主体的に活動を進められるように見守る。 ・必要に応じて仲立ちをし、解決へと導く。	・褒めたり認めたりしながら、ルールの必要性に気付くような声かけをする。	・どうしたらみんなが楽しめるか考えるような声かけをする。

(8) 本時の活動

<p>ねらい ・ 内容</p>	<p>○自分の気持ちを調整し、ルールを守って楽しく遊べることに気付く。 ・友達や教師とかかわりながら、互いに思いを主張し合い、譲り合う中で楽しく遊びが進められるようにする。 ・戸外で体をのびのびと動かして遊ぶ充実感を味わう。 ・友達とのつながりを感じながら、みんなで遊ぶ楽しさを味わう。</p>		
<p>仮説</p>	<p>友達とかかわりにおいて、葛藤や折り合いを付ける体験をしながら、自分の気持ちを調整し、ルールを守って楽しく遊べることに気付くであろう。</p>		
<p>時間</p>	<p>予想される幼児の活動</p>	<p>教師の援助</p>	<p>環境構成</p>
<p>9 : 30</p>	<p>○集まる ・教師の話を聞く</p> <p>○戸外に出てコートラインを引く</p>	<p>◇手遊びなどをして、全員が揃うのを待つ。 ◇ドッジボールのルールをわかりやすいように説明し、確認する。 ◇帽子をかぶるように促す。 (白・赤に分かれてかぶる)</p> <p>◇他児には、ウッドデッキに座るよう声かけし、ラインカーの係りする幼児は、初めての経験なので、寄り添ってコートラインが引けるようにする。</p>	<p>☆ルールの書かれたカードを黒板に表示し、確認し合う。</p> <p>☆石灰でラインを引く幼児がわかりやすいように予め地面に目印を付けておく。 ☆ラインカーとボールの準備をする。</p>
<p>9 : 40</p> <p>10 : 15</p>	<p>○ドッジボールを楽しむ</p> <p>○その場で感想を発表する。</p>	<p>◇ルールを守らなかったためにおきたトラブルに関しては、極力幼児同士で解決できるように促し、また、必要によっては仲立ちし、どうすれば良いか考える機会をもつ。</p> <p>◇内野にいる幼児がボールにあたったら、外野にいる12名の幼児と順次スムーズに交代できるように声かけする。</p> <p>◇外野に出る幼児が増え、ボールに触れられず、つまらなくなるように、内野に4名ほど残ったらゲームを終了する。</p> <p>◇ルールを守りながら活動できたか確認をして、「どんなルールが守れたか」、「楽しかったこと」、「困ったこと」等の発表を促し、この活動の反省をする。</p>	<p>○ ○ ○ ○</p>  <p>○ 9名 10名 ○</p> <p>○ ○ ○ ○</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外野6名ずつ ・ 内野9名・10名 <p>☆全員が落ち着いて話が聞けるように、ウッドデッキに座るように促す。</p>

第1回検証保育の様子



写真1

みんな意欲的に参加する。



写真2

ボールの取り合いになる。

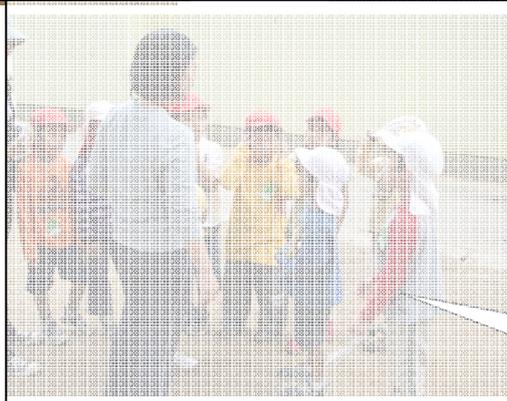


写真3

互いに意見を言って折り合いを付け

(9) 第1回検証保育における成課と課題

仮説の検証

自分の気持ちを調整し、ルールを守ることによって楽しく遊べることに気付けたか。

① 成果

ア ゲームの前に、ルールの確認をして、意識付けたことで「アウト・セーフ」の判断を自分たち考えるようになり、アウトを素直に受け入れられるようになった。

イ これまでの園生活の色々な場面において、自己主張をすることはできるが、自己抑制に欠け自分の気持ちを調整する力がまだ育っていない男児がいた。

しかし、本時の活動に至るまでの過程において、友達との折り合いを付ける体験を重ねていく毎に、変容が見られるようになった。本時の活動の友達との折り合いを付ける場面においては、「どうしたらいいのかわかる」と投げかけ考える機会をもったことで、気持ちを調整しながら、自分たちで話し合いを進める姿が見られた。

また、活動後に「今日は泣かなかったよ」と教師に言いに来たことから、ルールを守り自分の気持ちを調整することで楽しく遊べることに気付いたと考えられる。

そして、友達が「Kくん、今日は泣かなかったな。」と声をかける姿も見られ、周りの友達もその幼児の変容を認めたことがうかがえる。

② 課題

ア 幼児間から「このチームのままでいいのかわかる?」「このままのルールでいいのかわかる?」などの気付きがあり、チームやルールの見直しが出てくるのが望ましい姿であることに気付いた。そのためには、教師がチーム編成やルールを決めるのではなく、事前活動の中に幼児自身がチームやルールを決める時間を設ける必要があった。

イ 「ルールのある遊び」としてのドッジボールに、審判はおく必要がなかった。幼児同士のぶつかり合いこそが「規範意識」の芽生えにつながるのだから、幼児が主体的に友達とかわりながら互いに主張し合い、折り合いを付ける体験ができるよう配慮する必要があった。

4 第2回検証保育

保育指導案（幼稚園教育）

平成21年1月29日
 田場幼稚園 3組
 男児13名 女児18名 計31名
 教諭 花城 由紀子
 指導講師 上原 須美子

(1) 幼児の実態

動線に配慮した適切な片付け場所や、そこに何をしまえばいいかわかる絵表示をするなど環境の工夫によって、意欲的に後片付けができるようになり、「生活のきまり」が自分たちにとって必要な事と気付き基本的な生活習慣が定着してきた。

また、遊びを通して、順番を守る、譲り合う、交代するなどの「人間関係におけるルール」も守れるようになってきている。

そのような周りの変容の中、ある女児だけは、「生活のきまり」・「遊びのルール」は守れるが、友達とのかかわりがまだ希薄で、折り合いを付ける以前に自分の思いを主張することができずにいる。

(2) 設定理由

幼児の実態から「我慢する」、「譲る」ばかりではなく、時には友達とぶつかってお互いの思いを主張し合い、自分の思いを言葉で表現することも必要だと考える。その幼児が成長することで、他児も影響を受け、友達の思いに気付き、考えて行動できるようになると予想される。

そこで、時期的・発達のことを考慮し、集団で遊ぶお正月の遊び「カルタ」を用いてグループ活動を行うことにした。

本活動において、予め幼児自身が「ルール」を決めておき、その自分たちのルールに沿って遊ぶことで、きまりの必要性を感じ、友達とのかかわりの中で自分の思いを受け入れてもらったり、相手の思いを受け入れたり、折り合いを付ける体験から規範意識の芽生えが培われると考え、本活動を設定した。

(3) 活動名

「カルタ遊び」

(4) ねらい

集団遊びを通して、ルールの必要性や友達の思いに気付き、仲間と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

(5) 内容

- ① 「カルタ遊び」のルールを理解し、友達と競い合いながら楽しむ。
- ② 友達とかかわりながら遊ぶ中で、自分の思いを主張したり、相手の思いを受け止めたりする。
- ③ グループ活動を通して、友達と一緒にいる心地よさを味わう。

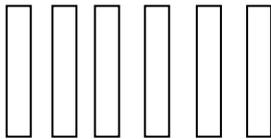
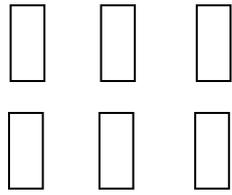
(6) 仮説

友達や教師とのかかわりにおいて、遊びのルールの必要性や友達の思いに気付かせる援助をすることにより、自分の気持ちを調整する力が育ち、仲間と一緒にいる心地よさを味わえるだろう。

(7) 評価

評価項目	○ 互いの思いを伝え合いながら活動をすすめる、友達と一緒にいる心地よさを味わう。		
評価の視点	A	B	C
	・自分の思いを主張しつつ、友達の思いを受け入れる心も持ち、かかわりを深め、一緒にいる心地よさを味わう。	・互いに思いを伝え合いながら、遊びのルールやトラブルが起きた時の解決方法を自分たちなりに考え出し、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	
援助の手立て	・幼児が主体的に活動をすすめられるように見守る。 ・必要に応じて仲立ちし、考える機会をもつ。	・自分の気持ちをうまく伝えきれない場合は、補足して、互いの気持ちが通えるようにする。	・思いや考えを受け止め、意欲的に活動へ参加できるように促す。 ・気持ちを代弁し、幼児同士の気持ちが通えるようにする。

(8) 本時の展開

<p>ねらい ・ 内容</p>	<p>○集団遊びを通して、ルールの必要性や友達の思いに気付き、仲間と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ・「カルタ遊び」のルールを理解し、友達と競い合いながら楽しむ。 ・友達とかかわりながら遊ぶ中で、自分の思いを主張したり、相手の思いを受け止めたりする。 ・グループ活動を通して、友達と一緒にいる心地よさを味わう。</p>		
<p>仮説</p>	<p>友達や教師とのかかわりにおいて、遊びのルールの必要性や友達の思いに気付かせる援助をすることにより、自分の気持ちを調整する力が育ち、仲間と一緒にいる心地よさを味わえるだろう。</p>		
<p>時間</p>	<p>予想される幼児の活動</p>	<p>教師の援助</p>	<p>環境構成</p>
<p>10:00</p>	<p>○集まる ・教師の話を聞く</p> <p>○テーブルと椅子の準備をする</p>	<p>◇言葉遊び等をして、全員が落ち着いて話を聞ける雰囲気をつくる。 ◇これからの活動の流れの説明とルールの確認をして、子どもたちがスムーズに動けるようにする。</p> <p>◇椅子・テーブルの持ち方や運び方について、安全に運んでいる幼児を褒めることで、他児に刺激を与える。</p>	<p style="text-align: center;">黒板</p>  <p>☆グループごとに椅子に座って並ぶ。</p> <p style="text-align: center;">↓</p>
<p>10:10</p>	<p>○グループでカルタ遊びをする</p>	<p>◇6グループ全体の活動の流れが同時に進められるようにかかるたの読み手を教師が担う。 ◇トラブルなどが生じた場合は、極力幼児同士で解決できるように促す。必要に応じて仲立ちして、どうすれば良いか考える機会をもつ。 ◇時には各グループを回り、戸惑っている子や活動に参加できない子、譲ってばかりの子がいないか様子を見て声かけし、全員が楽しく最後まで参加できるようにする。</p>	<p style="text-align: center;">黒板</p>  <p>☆椅子・テーブルの準備をする。 ☆同じ種類のカルタを6グループ分準備する。</p>
<p>10:35</p>	<p>○グループのチャンピオンは前に出て、自分の思いを発表する</p> <p>○チャンピオン以外の他児も自分の思いを発表する</p> <p>○教師の話を聞く</p>	<p>◇他児にチャンピオンを紹介することで、友達のがんばりや良さを認める機会をつくる。 ◇発表する際、うまく言えない幼児に対しては、教師が言いたいことを受け止め、補足し、みんなに思いが伝わるように援助する。 ◇「嬉しい気持ち」、「悔しい気持ち」等の発表を促し、活動を振り返る機会をもつ。 ◇「ねらい」を踏まえ、教師が感じた事も発表し、他児の思いや良さに気付くようにする。</p>	
<p>10:45</p>			

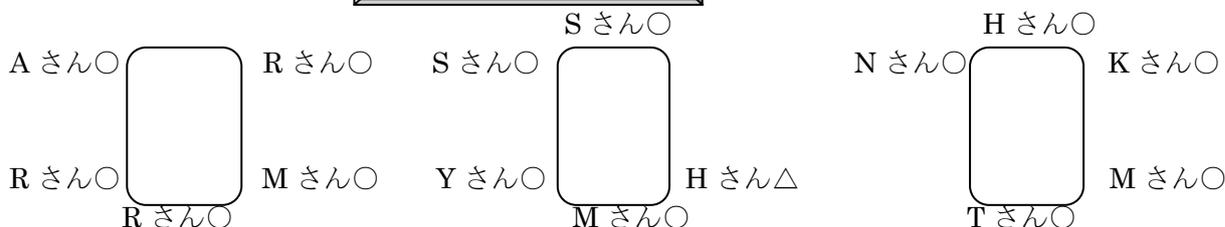
(9) 幼児の実態および座席表
 〈ひらがなに関する実態〉

○：読み・書きができる（74%） △：読むことだけできる（13%） □：読めない（13%）

★…特に援助が必要な幼児

- ・Yさん…自分の思いを言葉で表現することが苦手で、友達とのかかわりが希薄である。思いをくみ取りながら、グループの仲間との間を仲立ちし、心が通い合えるようにする。
- ・Rさん…明朗活発で友達とのかかわりを楽しんでいるが、落ち着きに欠け、トラブルが多い。自分で解決できるように見守り、必要に応じて仲立ちし、楽しく活動が進められるようにする。
- ・Tさん…最初は意欲的に取り組むが、思い通りに事が進まないとなげやりになる傾向がある。思いを受け止め励まししながら、最後までやり遂げられるように声かけする。
- ・Hさん…自分の思いを友達に伝えたい気持ちはあるが、うまく自己主張できずにいる。思いを受け止め、折り合いを付ける体験ができるように、言葉を補足し自分の思いを友達に伝えるようにする。
- ・Kさん…自分の気持ちを調整する力がまだ育っておらず、自己抑制に欠けるところがあるので、友達との折り合いを付ける体験を促し、ルールを守ることの必要性に気付くように援助する。
- ・Sさん…前回の活動で、1枚も絵札が取れなかったため、取れた際には喜びを共感し、自信を持たせる必要がある。

黒板



★Hさん△

★Tさん□



第2回検証保育の様子

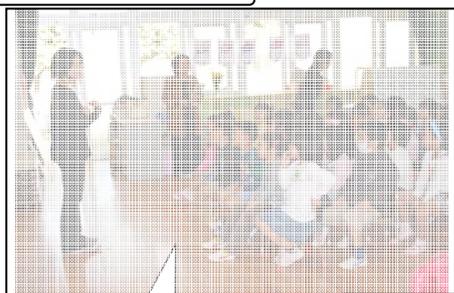


写真4

みんなで決めたルールを確認する。

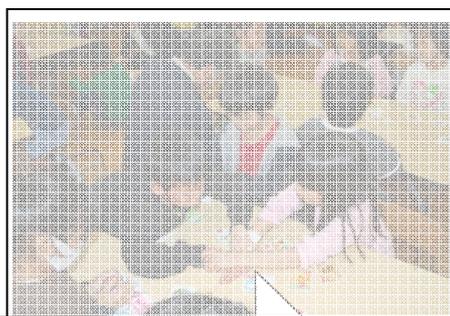


写真5

「自分のもの」と互いに主張している葛藤場面

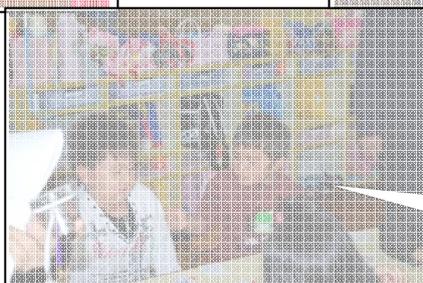


写真6

「同時に取ったから、じゃんけんしよう！」

(10) 第2回検証保育における成課と課題

仮説の検証

友達や教師とのかかわりにおいて、遊びのルールの必要性や友達の思いに気付かせる援助をすることにより、自分の気持ちを調整する力が育ち、仲間と一緒にいる心地よさを味わえたか。

① 成果

- ア 事前に自分たちで納得したルールを決めたことから、それを守ろうとする姿が見られた。また、活動に入る前にルールの確認をしたことで、意識につながり、ある男児が「みんな、手はお膝だよ」と活動中に声かけする姿が見られた。
- イ 全く絵札を取れずに活動を終わってしまう幼児がいないよう、活動途中に「まだ、1枚も絵札を取っていない人いる？」と声かけし、3名の幼児が手を挙げた。そこで、手を挙げた幼児の一人がいるグループでは、男児がその子の気持ちを察し自分が取った絵札を「はい！」と渡した。このような行動は、友達の思いに気付いての行動であると捉える。
- ウ 自分自身あまり絵札を取っていないが、活動中に友達との会話を楽しんでいた。また、トラブルが起きた際に教師は聞き役になり、見守った形でかかわっていると、その女兒が仲裁に入り自分の意見を言うなど、勝負にこだわらずに活動そのものを楽しんでいる様子がうかがえた。
- エ 園生活や家庭生活などにおいて、身近な人とかかわりを通して、葛藤体験や折り合いを付ける体験をすることの積み重ねが、自分の気持ちを調整する力へとつながったと考えられる。保護者に、家庭における幼児の成長を尋ねたところ、次のような声がきけた。

表2 保護者からの声

- ・話をよく聞くようになった。
- ・お気に入りの物も、友達に譲ったり、分けたりするようになった。
- ・近所の友達との遊びの場面において、子どもたちなりの遊びのルールがあり、「そんなことをしたらだめなんだよ」とお互いに注意し合っているように感じる。
- ・園からのアンケートを通して、家でのおきまりを決めていないことに気付いた。忘れないように紙に書いて、親も子も意識するようがんばってみようと思う。

② 課題

- ア 同時に絵札に触れたのに、じゃんけんをせず友達に譲ってばかりで、自分の気持ちを言えずにいる幼児がいた。「仲間と一緒に楽しむ」という点から考えると、もっと自分の思いを言葉で表現して、折り合いを付ける体験ができるように促す必要があった。
- イ 友達が話しかけても、表情を変えたり、うなずいたりするだけで一言も言葉を発しない女兒がおり、仲間と同じ活動をしているが言葉でのやり取りが少ない。事前に「伝え合う大切さや友達の気持ちを考えながら」と言葉を添えて全体に投げかけ、活動中に互いの思いを伝え合うようにする必要があった。教師は常に個と全体を見渡す事が適切な援助につながる。
- また、その女兒に寄り添って思いをくみ取り、周りの友達と心が通えるような丁寧なかかわりをもつ必要があった。
- ウ 最後の自分の気持ちを発表する場面では、ほとんどの子が「嬉しかった」という言葉を発表した。色々な言葉や気持ちが聞けるような発問の仕方を工夫する必要があった。
- また、日頃から言葉遊びや伝え合う活動を取り入れ、幼児の語彙や表現を豊かにすることも大切だと実感した。
- エ 「ねらい」を踏まえて最後に教師の思いを伝えたかったが、聞く態度がよくなって、うまく伝わらなかった。としては、部屋いっぱいになりすぎて、教師の音量が届く範囲、幼児の視野を考慮した聞く環境が整えられなかったことである。
- しかし、小学校への滑らかなつなぎとして、3学期から床ではなく、椅子に座る習慣を身に付けさせる意図もあった。椅子やテーブルを使ったままの状態で話を聞くということが、この段階ではまだ育っていないことの気付きもあり、聞く雰囲気づくりを更に工夫していく必要がある。

Ⅷ 結果と考察

基本仮説「幼児が教師との信頼関係を基盤に自己発揮し、様々な葛藤体験を通して、きまりの必要性や他児の思いに気付かせる援助を積み重ねることで、規範意識の芽生えを培い、自分の気持ちを調整しようとするであろう。」を具体化した2つの仮説の検証をすることで、本研究の結果と考察にする。

1 具体仮説①の検証

一人ひとりの幼児に思いを寄せ、内面を理解することで、教師との信頼関係を築き、心の安定から自己発揮したか。

(1) 事例

時期	S くん の 姿	教 師 の 援 助
入園当初	<p>入園当初は、泣きながらの登園だったが、母親と離れることはできた。お部屋で折り紙などの静かな遊びを好み、そこでは落ち着いていた姿が見られた。</p> <p>「お母さんに電話して！」と訴え、幼稚園降園後の学童保育へ行くのも拒み、帰る時間が近くなると、また、泣いて自分の気持ちを表現していた。</p>	<p>登園時は、笑顔で受け入れ、頭をなでたり、握手をしたり、スキンシップをして心の安定を図り、「S くんが今日も来てくれ嬉しいな」と朝の出会いを喜んだ。</p> <p>折り紙が好きなことに気付き、一緒に折り紙をしたり、エコ素材を使い製作遊びを楽しむことで、S くん の心に寄り添うようにした。</p>
一学期後半	<p>園生活にも慣れ、少しずつ戸外へと行動範囲も広がり、友達とのかかわりも増えてきていた。</p>	<p>同じ活動をしている幼児を呼び寄せ、一つの遊びの輪をつくり、仲間関係が築けるように促した。</p>
二学期前半	<p>夏休みをはさみ、二学期に入って、すぐに元通りにはいかず、教師の後追いなどもあった。</p> <p>大きな行事である運動会を目の前に、日々の練習には意欲的に取り組む姿が見られた。行事を通して、精神的にも強くなり、友達とのかかわりも出てきたが、まだ希薄な面があり、一人で遊んでいることもしばしばあった。</p>	<p>一学期同様に S くん の心に寄り添い、気持ちを受け止めるようにした。「一緒にお外に行こう」と誘い、友達がどんな遊びをしているのか視野を広め、自己発揮へと促した。</p> <p>運動会をみんなと協力してやり遂げたことをほめることで、自信へつなげていった。</p>
11月25日	<p>園全体で運動遊びに取り組む中、S さんも友達に刺激され、自発的に縄跳びや、フラフープに挑戦する姿が見られた。</p> <p>クラスでの活動の際に椅子を使う場面があり、S くん と他児が一つの椅子をめぐるトラブルが起きた。もう一つ近くに椅子があるのにもかかわらず、<u>両者とも「この椅子がいい」と自己主張し、譲ろうとしなかった。</u>友達とのかかわりが希薄だった S くん だが、「ぼくが半分座りかけていたんだよ」と自分の思いを言葉にして、はっきりと友達に伝えていた。</p> <p>教師の投げかけに対し、「S くん が我慢すればいいさ」、「Y くん が我慢したらいいさ」と一歩も譲らない。</p> <p>すると、「S くん が譲ったらいいさ」、「Y くん が譲ったらいいさ」と自分が我慢をするのではなく、<u>お互い自分に都合がいいように主張してきた。</u></p>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>両者の言い分を聞き、受け止める。すぐに、「こうしなさい」と答えを出さずに、「じゃあ、どうしたらいいかな？」と投げかけた。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>「二人とも譲らなかつたら、いつまでたっても解決しないね。ずっと話し合いを続けるの？」と問う。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p>「わかった、先生がいると解決しないみたいだから、職員室にいるね。二人で話し合ってるね。」と声かけし、職員室から見守っていた。</p> </div>

教師はいったん離れ、見守っていると、二人がトラブルになった椅子から離れて動き始めた。「どうしたの?」と聞くと、「もういい」と両者ともあきらめて近くにあった椅子を取り、各々のグループのところへ戻っていった。

クラスみんなに「二人は椅子の取り合いをしていたけど、自分たちで話し合って解決したんだよ。我慢して友達にゆずってあげたの。すごいね。かっこいいね」と二人のことをクラスの仲間に伝えることで、自分たちがしたことは、正しいことだったのだと気付かせることにもつながった。

(2) 考察

この事例から、幼児に思いを寄せ、内面を理解したことで教師との信頼関係を築き心が安定し、友達と主張し合うほど自己発揮するようになったといえる。

幼児の特徴とする、自己中心的な面も見られるが、この葛藤体験を通して、我慢することも必要なのだと気づき、椅子を譲ったと考える。一旦、教師が離れている時に他児と折り合いを付けたが、どのような話し合いがあったか定かではない。

しかし、このことから直接的な援助ばかりではなく、幼児の主体性を重視し、見守る大切さも実感した。結果的に二人とも別の椅子を選ぶことになったが、最後にクラスの仲間に二人のことをほめて、フォローしたことで、笑顔が見られた。幼児の一つひとつの体験が、幼児の何を育はぐくむことにつながるか、意味のあるものにするために教師は適切な援助を心がけていく必要があると実感した。

2 具体仮説②の検証

ルールのある遊びにおいて、互いに主張し合い葛藤体験を通して、きまりの必要性に気づき、自分の気持ちを調整しようとしたか。

(1) 事例

日時	Kくんの姿	教師の援助
	<p>クラスでドッジボールをしているときのことである。Kくんがボールにあたっただけで一旦外野に出たが、納得いかず教師に言い訳をする。「女の子が固まって、逃げる場所がなかった。Hくんはおればかりを狙っている。白チームに変わりたい。」等ルールは理解しているが、どうにかアウトを免れようと泣いて訴えてきた。</p> <p>「みんなそう言ってるよ。どうする?」と聞く。</p> <p>「嫌だ。」と自分の思いを通そうとする。</p> <p>友達がいろいろな意見を言うがKくんは「だってだって」と葛藤をしている。</p> <p>Kくんをゲームに誘うが拒んだ。Kくんは納得いかずゲームに参加しなかった。</p> <p>Kくんは首をふる。しかし、「だって、だって…」と言い訳をする</p>	<p>Kくんの気持ちを受け止め、みんなにもKくんの気持ちを伝える。「みんなはどうした方がいいかな?」と投げかける。</p> <p>他児が「ゲームだから勝ち負け関係ないよ。」「ボールがあたってアウトだから我慢した方がいい。」という意見が出たのでそれを取り上げ、Kくんに「みんなそう言ってるよ。どうする?」と聞き、主体性を考慮し、自己決定を促した。</p> <p>「かわいそうだから白チームに途中から変えたり、アウトをセーフにしたりルールをどんどん変えていいのかな?それでも楽しい?」と聞いて、きまりを守ることの大切さに気付かせる援助をした。するとほとんどの幼児が「だめ」と返事をする。また、ある幼児が「チームの人数がばらばらになるよ。」と答える。</p> <p>「このまま話し合いを続ける?それともKくんがルールを守って我慢してもう一度ゲームをした方がいい?」と聞くと「Kくんが我慢をして、ドッジボールをしたい。」とほとんどの幼児が答える。Kくんを無理強いせず、見守る。</p> <p>活動後、Kくんと一対一で話をする。ゲームに勝ちたいし、最後まで内野に残りたい気持ちを受け止める。「でもね、一人がルールを守らず途中でゲームがストップするとみんなは楽しい?」と聞き、Kくんが行った行為を振り返らせ、いいこと・悪いことを考える機会をもつ。</p>

	<p>Kくんは、まだ心の整理ができていないようだったが、教師の話を静かに聞いていた。</p>	<p>「自分の気持ちを我慢することも大切なことだよ。」と話す。みんな揃って3組なので、Kくんが一人でも抜けると寂しいことを伝え、次回はルールを守りながら、みんなで楽しく遊ぶことを約束した。</p>
--	--	--

(2) 考 察

上記の活動は、検証保育の事前活動として行ったものである。ルールを事前に確認し、納得した上で活動をすすめていたが、ゲームに夢中になり、「ルールを守らないといけない」、でも「まだ内野に残りたい」というKくんの心の葛藤があった。個の対応も必要の中、ゲームの最中ということで、全体の活動が面白みに欠けるのではないかと、教師自身も戸惑いながらの援助であった。Kくんは1学期から、いろいろな場面において、自分の思いを通そうと泣いて自己主張をしてきた。ルールのある遊びにおいては、Kくんのそのような課題が目につきやすくなった。

しかし、検証保育においては、Kくんと他児とのボールの奪い合いなどのトラブルはあったものの、主体的に解決できるよう促したことで、第三者も話し合いに加わり、自分たちで解決しようとする姿が見られた。活動後に「先生、今日は泣かなかったよ」とKくんから聞くことができた。また、「Kくん、今日は泣かなかったな」と友達が活動後に声かけしている姿から、クラスの仲間も友達の変容を認めていると捉えることができる。

このように、ルールのある遊びにおいて、葛藤体験、折り合いを付ける体験と、教師が「投げかける」、「気付かせる」、「見守る」援助を積み重ねることで、きまりの必要性に気付き、自分の気持ちを調整する力がはぐくまれたといえる。

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 幼児の規範意識はどのように芽生え、どのように培っていくかを理論研究したことにより、理解が深まり、幼児期の葛藤体験の重要さに気付いたと共に、援助の仕方が明確になった。
- (2) 幼児一人ひとりに思いを寄せ、内面を理解して真心をもって接したことで、信頼関係が築かれ自己発揮へつながった。
- (3) ルールのある遊びを通して、幼児が葛藤体験を繰り返し、適切な援助を行ったことで、きまりの必要性に気付かせることができた。そして、幼児の自分の気持ちを調整しようとする心の育ちによって、仲間と一緒に遊ぶ楽しさ、一緒にいる心地よさを味わうことができた。
- (4) 家庭における幼児の生活態度と保護者の意識アンケートを通して、子どもの実態と保護者の意識が深く関係していることがわかった。その後、集計結果と共に幼児の基本的な生活習慣が身に付くよう、また、家庭でのしつけに対し保護者の意識が高まるよう考察と方向性を沿えて家庭へ知らせた。そのことは、保護者が視野を広げ、家庭におけるしつけに対して意識を高め、幼児の成長を促す手立ての中の一つとして有効であった。

2 課 題

- (1) 幼児が、様々な思いを言葉で表現できるような教師の発問の仕方の工夫。
- (2) 自己主張の苦手な幼児もいるので、一人ひとりの幼児のみとりをしっかりと行い、きめ細やかな援助をする。
- (3) 幼児が落ち着いて聞くための環境の工夫。

3 今後の方向性

- (1) 自分の思いをうまく相手に伝えられるような「言葉による表現」を豊かにするために、語彙力を付ける言葉遊びを年間通して取り組む。
- (2) ルールのある遊びについての教材研究。
- (3) 異年齢の人たちとのふれあいの大切さを実感できるよう、また、小学校への円滑なつなぎのために、これまでの異年齢交流の持ち方の見直し・検討。
- (4) 幼児の成長をより望ましい方向へ導くために、今後も家庭との連携を重視し、実践していく。

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・全国国公立幼稚園長会 2009 「幼稚園じほう」
- ・文部科学省 2008 「幼稚園教育要領解説」
- ・西久保禮造著 2008 「実践ハンドブック幼稚園の教育課程と指導計画」株式会社ぎょうせい
- ・大場幸夫監修 2008 「保育所保育指針ハンドブック」学研
- ・森上史朗・柏女霊峰編 2006 「保育用語辞典」ミネルヴァ書房
- ・今井和子・神長美津子 2003 「『わたしの世界』から『わたしたちの世界』へ」株式会社フレール館